

大構造改革の焦点はどこにあるか第6号(2002年02月25日)

第6回 壊れてしまった日本のチェルノブイリ原発型金融・証券・資本市場システムを
放置している限り日本の再生はありえない

その1

国家の役割りは資金の公平分配機能だけにあるのではなくて市場経済国家の胴元として一
国経済の公正出力の確保できる本物の金融・証券・資本市場メカニズムを創り上げること
にある。そのためには、まず機能停止に陥った日本の金融・証券・資本市場メカニズムの
崩壊原因を究明し国家自らがメカニズムの再建を図ることによって信頼回復を急がなけれ
ばならない

<目次>

1. 社会構造・制度から見たバブルの検証

- (1) 日・米・欧で異なる「夢」の求め方・・・ 夢抑制・・・ヨーロッパ
夢を実現させる工夫・・・アメリカ 夢に溺れる日本
- (2) 備蓄米を「たねもみ」と錯覚して破綻してしまった日本の市場経済システム

2. 夢を大きく膨らませながら、それを実現させる工夫をしたアメリカの知恵・・・推進と制 御のメカニズム

- (1) アメリカ型収益追求資本主義メカニズムの鍵・・・夢で破壊されない頑丈なメカニズム作
り
- (2) 公益理念と掟に守られる国家胴元
- (3) 公正出力の把握と確保・・・単一共通メーターと完全決済と投機的信用制御と 10b-5 ルー
ル

3. 市場経済敗戦ショックからの脱出への道・・・「市場のことは市場に聞く」前に「市場経 済のメカニズムは国家の責任で創り上げる」ことを知ることにある。

- (1) 国家胴元の役割りを忘れた日本
- (2) 「公正時価」を創り上げる「プライスメカニズム」の欠陥が生む国家信用力の低下
- (3) 国際市場経済メカニズム戦争の時代

毎年のように

3月危機が口にはじめから既に十数年がたつ。

はじめは期末における株式などの市場価格のぶれによって期待収益が上がらなくなるという欲張った心配から生まれていた3月危機が、何時の間にか一企業一銀行の財務内容の問題を越えて一国の金融・財政システムからさらに国家信用そのものが危ぶまれるようになってきた。

ここまで来てやっと日本のリーダー達も市場経済という怪物の恐ろしさが少しづつ分りはじめてきた。

それにしても僅か十数年の間に金融資産大国と煽てられた日本が一転して大赤字サラ金国家へと転落することになった環境の激変のスピードの早さには驚ろかされる。

致命的な構造欠陥が隠されていながら殆どの人がそれに気がついていなかったのである。

日本ではこの十数年経済活力低下の問題を構造転換期における一時的な活力低下の問題として受けとめ楽観的な立場からのピボウ策が繰り返されてきた。

しかし、その改革に伴う混乱の嵐はとどまることなく次々と襲いかかっている。

果たして日本は構造改革によって今までのようなタテ公平分配依存型の社会主義社会システムから脱却して一気に世界から求められているような「市場経済競争国家」へと変身することが出来るのであろうか。又すべきなのであろうか。

現実の成り行きを見る限りカルテル依存腐敗体質の改善と日本的カルテル社会を支えてきた規制を緩和する政策はそれなりの効果をあげ、一部の民間企業はその活力を再生しつつあるように見える。

しかし国全体から見る限り収縮、デフレ経済に陥った日本の明日の展望について確固たる自信に裏打ちされた政策が見出せないまま国全体が変動する市場のメカニズムにふりまわされ漂流しはじめているように見える。

日本は建国以来、外来文明をうまくとり入れそれなりの成功を納めてきた。

しかし今、冷戦構造が崩れ世界中で市場経済の流れが加速するなかで諸外国なかでもアメリカ等から求められている時価会計、ペイオフ等収益重視弱肉強食型の市場経済競争システムへの転換はリスク挑戦力、資本競争力の弱い日本にとってあまりにも厳しい課題で

ある。

又、对中国交易の拡大における低コスト商品持帰りによるデフレ経済の移入はコスト競争力の低下してしまった日本を苦しめはじめている。

こうした現実の事態から見ると日本は現実の難問を第2次大戦前後のように占領政策の延長線上の課題として受け入れ、市場経済属国として身を外圧による成り行きに任せるのか、それとも多少は自律の道を模索するかの選択肢しかないように思える。

それにしても、これほどまでに一国の本丸が「天」依存主義に冒され市場経済メカニズムの主権者としての役割りを忘れ、お城の中でのどかな不公平分配論に熱中している国は少ないのではないのだろうか。

こうした事情を念頭において今一度バブルの検証を行いながらブラックホールから脱出に必要な問題点を絞って考えてみることにしたい。

1. 社会構造・制度から見たバブルの検証

(1) 日、米、欧で異なる「夢」の求め方

償却しても償却してもなお増える不良債権、公的債務、どんどん目減りする資産経済、収縮するデフレ経済に悩む日本・・・その混乱の状況は欧米先進諸国が経験した社会制度の変革に伴って発生したヨーロッパ革命時代の混乱、アメリカ大恐慌時代の混乱と通じている点が少なくない。しかし、その混乱を惹き起した社会環境、制度、風土から見るとかなり事情が異なっている。

それは 限られた空間の中で革命の嵐に揉まれすぎた結果、夢を追いすぎて現実社会の制度が攪乱されないようにするために夢を或る程度抑制する社会システムを創り上げたヨーロッパと

その抑制をはねのけて広いアメリカの大地に夢を求めて進出したが、弱肉強食の世界の中で夢を膨らませすぎると獲物を獲るしかけが広がりすぎてリスクが大きくなる欠点に悩みながら夢を実現させる工夫を繰り返して成長してきたアメリカに対し

日本は始めから夢を持つことの大切さは分っていてもその夢を実現させる社会的しかけの必要性が十分に整わないまま夢に溺れてしまったことである。

それは農耕民族と狩猟民族とでは夢の画きかたと実現の方法そのものが異なっているこ

とから生まれている。

つまりヨコに夢を大きく拡げすぎるという失敗を繰返しながらもその失敗を克服し新しいメカニズムをヨコに創り上げてきたアメリカに対して、日本はバブルをヨコに拡げる「種もみ運用システム」そのものを持たないまま限られた土地・株式などの長期資産価格を閉ざされた煙突の中で嵩上げして、その見せ金・評価益という夢だけをあてにみんなで分配することが出来てきたことが不幸であったともいえる。

いわば「夢担保・水割り酒・楽天国家」経済が大きくなりすぎた失敗にある。

これは自由・競争に伴って発生する投機とリスクの存在を知って自らの力でそれに対応できる社会システムを構築してきた欧米諸国とは違って、投機・リスクの本質を理解することも、それに対応するリスク挑戦型の市場環境が整わないまま、一生懸命に働けば天の加護によって夢がそのまま現実のものとなると錯覚してリスクマーケットにそのまま直接参入して自滅してしまった日本との違いなのである。

そして、日本は筆者がこの十数年、訴え続けてきた副作用の大きい原発型市場経済システムの危険性が理解できないまま制御棒も放射能測定器も持たずにスイッチを入れ金融臨界事故をひき起こして被爆し経済出力が一気に低下してしまっているのである。

目次へ

(2) 備蓄米を「たねもみ」と錯覚して破綻してしまった日本の市場経済システム

日本は第2次大戦敗戦後もアメリカの傘の中で生き死を伴うリスクをとることなくリスクの少ない製造業に徹して勤儉貯蓄に励み金融資産大国を創り上げ、莫大な金融資産を貯めこむことに成功した。

しかし自ら貯えた備蓄米を「たねもみ」として活用するために必要なメカニズム……みんなですべてに挑戦し付加価値を創り出す本物の証券、金融、資本市場というメカニズムを作ることを忘れてしまっていたのである。

そして備蓄米の自動複利運用が可能だと考え、計算上の含み益で膨らませた見せ金金融資産をベースにした競争空間を創り上げ、リスクをとらないですむ本丸の中で政治、行政、銀行、企業、マスコミ等みんなですべてでブローカー取次手間賃ビジネス空間を肥大させてしまったのである。

そしてとうとう主力エンジンとしてきた間接金融システムはゼロ金利となって出力機能を停止しただけでなく、補助エンジンである資本市場も投機化が激しくなりすぎて機能不全をおこし、とうとう日本の経済システム全体が揺らぎはじめて世界のはげタカの標のとされ日本売りが始まることになってしまったのである。

2. 夢を大きく膨らませながらそれを実現させる工夫をしたアメリカの知恵・・・推進と抑制メカニズム

アメリカでは自らの夢を実現させる為、野望に燃え探究心に富んだ自由・独立競争ベンチャー達が軸となって自由・競争・拡大型の新しい資本主義が創り上げた。問題は国家集団として、その夢、野心、投機取引をどのようにしてうまく活用し制御するかである。

1929年大恐慌という大試練を経験したアメリカが創り出したそのメカニズムの強さは、夢、野心、投機取引によって膨らむ投機競争空間の広がり、現実の社会生活との関係を現実的な眼でしっかりと捉えそれを結びつけるための工夫にある。

それはロケットの位置を適確に捉えることによって戦略を遂行できる国家胴元システムとしてのコントロールセンター機能をしっかりと確立すること。

そして夢と現実の紐をしっかりと結ぶ役割を果す全参加者の合意で作られた競争市場における掟・タブーを確立したことにある。

(1) アメリカ型収益追求資本主義のメカニズムの鍵

人間の欲望をそのままむき出しにして大きな夢の実現を競う資本主義の競争原理を導入しすぎると弱肉強食によって貧富の差が大きくなり社会が不安定になるだけでなく、国家そのものの存立基盤を危うくする危険のあることは、ヨーロッパ先進諸国が経験した革命の嵐とか、アメリカ大恐慌の教訓が教えてくれている。

こうしてこの教訓を生かしてさらに大きな夢を実現するためには収益追求型市場経済競争のゆきすぎに伴う究極の失敗・・・決済不能によってメカニズムそのものが破壊されないようにするための工夫の結果として「頑丈な国家胴元機能」と参加者全員で「特別の掟」を創り上げたのである。

目次へ

(2) 公益理念と掟に守られる国家胴元

具体的には市場経済全参加者で確認し創り上げた国家を市場経済の胴元とする人工的な「公益」理念の確立である。又、この公益を守り実現するための「タブー」を持ちそれを実現する執行力を持つことによって国民経済全体が自由競争メカニズムを維持し発展させるようにする社会インフラシステムを持つことにある。

このメカニズムは大恐慌時に自由競争面が強調されすぎた結果、歪んだ信用経済空間だけがバラバラに膨張し結局、銀行制度、雇用制度、市場取引制度だけでなく国家の租税・財政・金融・企業システムなど全体のメカニズムが崩壊し決済不能となってしまって大恐慌をひきおこした経験から生まれている。

つまり投機信用の歯どめがきかなくなると市場経済金融臨界事故の連鎖反応によって国家信用までもが破壊され世界恐慌にまで広がってしまった経験から生まれてきているのである。

この大恐慌後、アメリカが創りあげた国家を最終責任者とする胴元コントロールセンター機能と、全参加者に求められる掟はその後、証券・金融・市場関係法の形をとってアメリカ国内に承継されているだけでなく、このシステムがグローバルスタンダードとして世界に拡がりつつあるのである。

現在、日本が直面している時価型市場経済への移行、完全決済・不良債権処理、ペイオフ等の発想はすべてこのアメリカ型の証券、金融、資本市場メカニズムの基本哲学から生まれている。

(3) 公正出力の把握と確保・・・単一共通メーターと、完全決済と、投機信用の制御とルール 10b-5

全参加者共通メーターと共通ルールによって確保される公正出力計算と国家戦略

具体的には租税システム、企業活動、金融取引などすべての公経済参加者も民経済参加者全員で合意した市場経済の統一ルールが確立されていることである。

そして市場における価格・金利の裁定取引によってすべての経済取引が一元的に評価・洗い替えされることによって正確な成果計算が行なわれ、より効率的な国民経済活動が行えるという市場経済原理主義に基づく「公益」理念が明確に確立され実行されていることにある。

この公益理念が確立され全員で同じルールとメータですべての経済を評価し洗い替えることによって経済の水漏れがチェックされ国全体の公正出力が把握されてこそ国家としての戦略執行が可能になるのである。

完全決済の実行による胴元破壊の防止

そのためには公正出力の把握だけでなく金融、証券、資本市場取引によって発生しやすい未決済勘定（不良債権）から国家債務まで一元的なルールと評価基準とメーターによって日々洗い替えられ掌握されるメカニズムを持つことによって水漏れ経済の死角を封じ原因不明の公的債務によって国家胴元が破壊されることなく明日への国家戦略の展開を可能にしているのである。（1934年証券取引所法第2条規制の目的）

投機信用の制御

アメリカ大恐慌の経験から生まれた投機エネルギー活用型の証券、金融、資本市場メカニズムには欠かせない基本制御機能の1つとして、証券を担保とする貸出（貸株）による信用量を抑制するため一定の保証金を強制することによって一国経済における過度の信用膨張・収縮による混乱を惹き起こさないように工夫されている。

これは、銀行による株式保有規制、貸株・空売りによる信用混乱を防止する発想と同じである。

日本にはこの制度の一部を真似て作った実物取引の形式をとった定形化された信用取引制度があるが、銀行による株式保有、貸株・空売りには適用されないことがバブルのブレと混乱を大きくしてしまったといえる。

（次回以降詳述の予定・・・1934年 証券取引所法 第7.8条）

原発型市場経済抑制法・・・ルール 10b-5

また公益理念で運営されるメカニズムが歪められないようにするための参加者に求められる厳しい「掟」が現実に執行されてこそ市場経済出力が得られるように工夫されているのである。

その中心となる「掟」は通称 10b-5 といわれている。それは国も企業も銀行も投資家など全参加者によって惹き起される可能性のある相場操縦的行為、詐欺的行為を排除するため政治、財政、金融、企業活動、投資契約、仲介人取引などすべての経済取引に包括的に適用されるルールで投機取引、価格変動取引を是認し活用する原発型市場経済システムには不可欠の基本ルール・・・いわば市場経済憲法として確立され実現されているのである。

(1934年 証券取引所法 第10条)

ルールの洗い替え機能

そして、現実の経済と基本ルールとのギャップの発生を避けるためパトカー（法）と暴走族は常に相互に牽制し合い乍ら併走する中でパトカーが一時的に後れをとった時に発生する大混乱・・・ブラックマンデー、S.L 危機、ヘッジファンド破綻、エンロン破綻、ツイントワー崩壊等、幾度ものメカニズム危機を迎えながらもその困難をのりこえメカニズムを修復する復之力を持っているところにアメリカ市場経済システムを支え人工国家の強があるのである。

3 . 市場経済敗戦ショックからの脱出への道・・・「市場のことは市場に聞く」前に「市場経済のメカニズムは国家の責任で創り上げる」ことにある。

(1) 国家胴元の役割りを忘れた日本

こうしたアメリカ型証券、金融、資本市場メカニズムに対する国家の取り組み方とメカニズムの組み立て方を比較してみると日本はあまりにも無防備のまま形だけのメカニズムに頼ってザ・マーケットに深入りしてしまったことが分ってくる。

こうして日本は自ら異質者間で競い合う市場経済メカニズムを創り上げる意欲も、メカニズムの胴元としての国家の役割りが理解されないまま「市場のことは市場に聞け」「政治家は株に手を出さないことを誇り」としている間に世界中の市場経済メカニズム創造強者集団の手によって、同質者社会で膨らませてしまった日本の「財政」「金融」「企業」「資本市場」「土地・長期資産」「社会」システムなど国民経済の中核部分のメカニズムが無原則につぎつぎと解体されてしまいつつある。

この大きな流れの中で国会をはじめ役所も企業も市民もマスコミも国中で一生懸命もがいていながら既存メカニズムの崩壊と市場経済競争敗戦から生まれたデフレ経済の対応に追われ依然として明日への灯りが見つけだせないで悩んでいるのである。

同じように証券市場型のメカニズムを導入しているように見えるヨーロッパ諸国、アメリカ、アジア諸国に較べて日本だけ何故ここまで追いこまれているのであろうか。

それは日本が島国という地理的条件と安保条約に守られ自ら生き死にを忘れても生きてゆける楽園国家であるために、アメリカのように異質者で作りあげた人工心臓のように自ら厳しいメカニズムを持つ必要性そのものが理解できていないまま皆んなで欠陥メカニズ

ムを放置して過ごしてきたことにあるのである。

こうしてこの数十年市場経済メカニズム戦争の嵐が襲ってきてもなお厳しいリスクは民間企業に委ね国の本丸だけは国中の手間賃ビジネスのあがりて十分に食べられる無責任楽天空間を頼りにして市場経済主権者としての基本責任を忘れてしまっていることにある。

そして日本は市場経済先進諸国が経験した失敗の原因を学ぶことも証券・金融・資本市場経済における国家胴元の責任、役割りの重要性も忘れ、激しい投機競争に接しても破壊されない堅固な市場経済メカニズムを創りあげてを忘れていたのである。

(2)「公正時価」を創り上げる「プライスメカニズム」の欠陥が生む国家信用力の低下

そしてこうした国家胴元機能不在のまま非常事態を迎えている日本においては、投機取引を容認する証券市場の健全性を維持するために必要な3つの基本的制御機能

- ・相場操縦的行為の排除
- ・詐欺的行為の排除
- ・空買い・空売りなどの投機信用の制御

が事実上機能しないなかで、内・外の市場取引強者による市場破壊行為が横行し日本は自ら「公正時価」を創り上げる「プライス・金利形成メカニズム」を確立する力を失ったまま、時価型市場経済の海を漂いはじめ日本全体がスパイラル的に資産・経済デフレというブラックホールに吸いこまれてつつあるのである。

それはデフレ対策が先か、不良債権処理が先か、公的資金投入が先か後かの問題ではない。

構造改革移行に伴なう大きな谷間の中で「公正時価」を生むプライスメカニズムが働かないまま証券・金融・資本市場経済システムだけでなく財政・資産経済など国民経済全体のメカニズムが狂ってしまっていることに問題があるのである。

残念ながら日本の本丸は同質者社会であるために、こうした市場経済敗戦の現実をメカニズムの欠陥問題として捉えメカニズムそのものを自己改革して対応する風土を持っていないだけでなく、むしろ厳しい証券・金融・資本市場経済戦争を避け本丸に逃げこむ同潮が高まっているほど平和呆けが進んでしまっているのである。

(3)国際市場経済メカニズム競争の時代

しかし、何時までも平和な楽園が続くわけではない。

今の日本に必要なことは国自らが市場経済敗戦の実態を明らかにし本物の証券・金融・資本市場のメカニズムを再構築し新たな活力を生むベンチャー国家へ変身する図面を自ら画いて世界のリスクマーケットの参入し国民経済全体を活性化しなければならない時を迎えている。

この国家の役割りが確認されてこそ世界経済とリンクした本物の「証券投資循環メカニズム」が確立されることによって経済全体が活性化され日本経済が更生するのである。

「市場のことは市場に聞く」のではなく「市場経済のメカニズムは国家が創り上げる」ことによって「国際市場経済メカニズム競争」に勝てるのである。

このまま底が抜けて「壊れてしまった日本の原発型証券・金融・資本市場システムを放置しお互いに責任をなすりあっているだけではいくら莫大な公費を投入しても日本経済の再生はありえない」のである。

それにはまず国会が自らの責任で「日本の証券・金融・資本市場システムの人工心臓機能・・・金利・価格形成機能が内外の市場経済参加者の私益によって機能停止に陥ってしまった原因を自ら解明し世界に通ずる本物の投資循環型の証券・金融・資本市場メカニズムを創りあげベンチャー型の実物経済活力を生かす努力をするより外に道はないのである。

次回以降・・・具体的な推進・制御機能の問題点

・公益・証券・時価とプライスメカニズム・法と実現・証券信用・ベンチャー政策・・・